

サブカルチャーの大波

——児童伝記等へのサブカルチャーの影響

濱崎桂子

「さすが、時代劇オタク。」

「オタクというな。」

「じゃあ、時代劇マニア。」

「マニアというな。何度もじゃない、何十回もいってるだろ、時代劇ファンっていえよ。っていうか、この場合、時代劇はあんまり関係ないと思うんだけど。」

(楠木誠一郎『平清盛は名探偵!』講談社青い鳥文庫)

青い鳥文庫の人気シリーズ「タイムスリップ探偵団」は、三人組の子どもたちが坂本竜馬、紫式部といった歴史上の有名なたちと出会い冒険にまきこまれるファンタジーである。タイムスリップした先の平安時代の海辺で、拓哉は豊富な歴史知識を披露する亮平を「オタク」とからかい、亮平はむきになって「オタクというな」と言い返す。亮平と拓哉のこの「じゃれあい」は、毎巻のようにくりかえされている。

八〇年代になって一般化したオタクという言葉は、ゲーム、アニメ、漫画、ファッション、アイドル等のサブカルチャーに精通する人々を指すことが多い。ここで注目したのは、もともとサブカルチャー等にのめりこむ若者につかわれていたオタクという言葉が、歴史に詳しい亮平をからかう言葉になっていることである。拓哉という十二歳の少年にとって、並はずれて歴史に詳しい亮平は、ゲームやアニメの細部を把握するオタクたちと似たようなものらしい。さらに想像をたくましくすれば、このシリーズの読者の中にも、歴史愛好家をオタクととらえる子どもたちが多数存在しそうである。

しかし、歴史書を真面目に読む歴史好きの人々の多くは、歴史をサブカルチャーの一種と考えてはいないだろう。サブカルチャー（下位文化）どころか、歴史をむしろ特権的なものと位置づけているかもしれない。子どもたちの間で歴史とサブカルチャーを分ける壁が低くなっていることに、